

チャールズ・フィニーのリバイバル神学への ウェスレーとメソジズムの影響についての一考察

猪野 正道

序論

本論の目的は、ウェスレーの聖化論とメソジストの "Altar Call Evangelism" が、19世紀アメリカのリバイバルスト、チャールズ・フィニー (Charles G. Finney, 1792–1875) のリバイバル神学に与えた影響について考察することである。"Altar Call Evangelism" は、メソジストそしてフィニーの流れにおいては、単なる信仰決心を募る伝道方法ではなく、聖化論を基軸とするクリスチャン・キャラクター形成論とリンクした実践神学の枠組みにおいて捉えるべきものであると思われる。本論の構成は、第1節でウェスレーの聖化論のフィニーへの影響について検討し、第2節では、メソジストの "Altar Call Evangelism" のフィニーへの影響について考察することにする。

I ウェスレーの聖化論のフィニーへの影響について

ウェスレーは18世紀英国の教会と社会に、キリスト教の真髄を体験した真のキリスト者を形成すること、それをメソジストと呼ばれる人々の中で実現していくことが使命であると自覚していたが、このウェスレーの人間形成論の要になるのが『キリスト者の完全』である¹。ウェスレーは1725年、23

¹ 藤本満「ウェスレーによる「人間形成論」論」『キリスト教と人間形成』青山学院大

歳の時、ジェレミー・テイラー主教 (Jeremy Taylor, 1613–1667) の『聖なる生と死との規則と実践』を読み、自分の心と生活のすべてが、神の前で責任ある存在であることを悟り、聖なる心と生活がキリスト者としての最大の関心事になり、そのために日記の習慣を始めて、死の1週間前まで66年間継続した。ウェスレーは1726年に、ドイツの神秘主義者トマス・ア・ケンピス修道士 (Thomas a Kempis, 1379–1471) の『キリスト者の模範』を読みキリストの謙卑に倣うこと、自己放棄、愛の実践という心の宗教の本質と範囲への洞察を深めた。その後敬虔文書 (Devotional literature) の作者として知られていたウィリアム・ロー (William Law, 1686–1761) の『キリスト者の完全』からキリスト教の本質と目的は、人を神のかたちに戻させ、高い次元の幸福へと備えることにあることを学び、『厳粛なる召命』からはこの目的のために祈り、黙想、聖書研究、断食、聖餐という恵みの手段を学んだ。特に日常生活全般を神へのデボーションとする信仰生涯を心がけるというローの教えは、ウェスレーに霊的覚醒をもたらすものであった²。ウェスレーが希求したのは、聖書を真理の唯一の規準として心も生活もキリストのようにするという生き方である。メソジスト伝道者の神学的なスタンダードと呼ばれる説教「心の割礼」においては、心の割礼とは聖書が聖めと呼んでいる魂の習性的な気質 (habitual disposition) であると述べている。藤本は、habitual とは、恵みと修練を通して、人格の中に培われたところの一貫した、一定した状態を指していると説明している。ウェスレーは完全について、状態としてではなく、毎瞬間成り立つ神との関係として捉えている。全き愛は修練されて、人格や性格や人柄とも言える内的な質 (habitus) となり、そこに不動性・堅実性・安定性・質性が伴う。それが habitual disposition である³。

ウェスレーは「キリスト者の完全」について次のように要約している。「それは『罪からの救い』である。それは『全き愛』(Iヨハネ四・18)である。全き愛こそが完全の本質である。……全き愛と不可分な結実として、常に喜び、絶えず祈り、すべてのことに感謝することが挙げられる (Iテサロニケ

学総合研究所キリスト教文化センター編 (新教出版、2004年)、143–151頁

² ジョン・ウェスレー 訳・注 藤本満『キリスト者の完全』(イムヌエル総合伝道団、2006年)、14–21頁

³ 『キリスト者の完全』28頁注

五・16 他)。それはさらに成長する愛である。……したがって、私たちメソジストのすべての伝道者は、必ず信徒たちにキリスト者の完全について説き明かすことを常に、力強く、明白にすべきである。そして信徒たちはみな、この一つのことに専心し、それに向かって苦闘すべきである」⁴。

「キリスト者の完全」は贖い主であり祭司であるキリストに全く依り頼む信仰なしに不可能であり（ぶどうの木・枝・実の有機的關係）、また聖霊の働きが深く関わる。キリストの救いの恵みをキリスト者の生の営みに及ぼすのは聖霊である。この御方が聖なるいのちを吹き込み、心の思いを聖め、平安と慰めを与え、きよめられた確証を与え、救いの真理へと導き、心の中に聖なる願いを造り出す。「キリスト者の完全」は常にキリストへの信仰により、聖霊によって与えられた恵みが、信仰者の敬虔の修練を通して成長していくものである⁵。聖霊によって与えられたものは何でも、信仰者自身の血肉となるように内的実質が日常の中で修練されて、初めて **habitus** としての気質が培われていく。こうした健全な内・外一致及び信・倫一致の姿勢は、ウェスレーが 17 世紀の実践神学 (**practical divinity**)、即ち日常生活のホーリネス (**holiness of common life**) と呼ばれていたアングリカンの生活的・人格的神学を引き継いだことによる⁶。

このような意味でウェスレーの「キリスト者の完全」は優れたクリスチャン・キャラクター形成論と言い換えることができると思われる。クリスチャン・キャラクターの概念は、"**already but not yet**"というクリスチャン・ライフの実質の間にある緊張を除去することなく、クリスチャンになるという特有のコミットメントから帰結する生活の最も明確な形態 (**definitive form of life**) として、明瞭にクリスチャン・ライフを形成する方策を提供するものである⁷。

⁴ 『キリスト者の完全』271-74 頁

⁵ 『キリスト者の完全』39, 40, 119, 127, 141, 182, 195-98 頁

⁶ 藤本満「アナログア・フィデーとウェスレーの神学原則」『ウェスレー・メソジスト研究』1 (教文館、2000年)、23-47 頁、坂本誠「ウェスレーのプラクティカル・デイベニティー」『ウェスレー・メソジスト研究』1 (教文館、2000年)、49-62 頁

⁷ Stanley Hauerwas, *Character and Christian Life* (Notre Dame: University of Notre Dame Press, 2001), 183, 229. ハワーワスは、現代クリスチャンの倫理的無力さへの問題意識から、クリスチャンの道徳的生活を表現する十分な方策を発展させるために本書を執筆した。

ウェスレーによるクリスチャン・キャラクター形成の実践神学への集中は、18 世紀の英国に信仰復興をもたらし、19 世紀の世界宣教への備えをもたらしたのである⁸。

フィニーは、終生リバイバルリストであったが、1832 年以降は、定住牧師（ニューヨーク市内の長老派 **Chatham Street Chapel 1832-35**; 会衆派 **Broadway Tabernacle 1836-37**; オハイオ州の **Oberlin Congregational Church 1837-72**) として、また 1835 年以降はリバイバルを促進する伝道者、社会改革にコミットしうる人材育成を目的としたオベリン・カレッジ (**Oberlin College**) の神学教授 (1835-75) また学長を兼務 (1851-65) するという幅広い働きをした人物である。このフィニーのキャリア自体が、彼の関心がどこにあったかを物語っている。特に 1834-35 年にかけて **Lectures on Revivals of Religion** を為し、それを出版した 40 歳を越えてからの成熟期のフィニーの関心は、クリスチャンの聖化に向けられていることに着目したい。フィニーは **Lectures on Revivals of Religion** においてリバイバルを次のように定義している。

- 1) リバイバルは教会内の **Backslidden Christian** が心砕かれ、罪の自覚と悔い改めに導かれること。神への服従の新しい始まり。
- 2) クリスチャンの信仰が刷新され、神の愛に満たされて、失われた魂のために祈り、全世界の救いを希求するようになること。
- 3) リバイバルはクリスチャンに対する世と罪の力を打ち砕く。天国のすばらしさを垣間見て、神との合一を願うようになり、この世の魅力は粉碎され、罪の力が克服されるようになること。
- 4) このように教会が霊的に覚醒し改革されると、罪の自覚 (**conviction**)、悔い改め (**repentance**)、改革 (**reformation**) という段階を通して、罪人の改革と救いがもたらされるようになる。彼らの心は砕かれ、変えられる。人間社会で最悪と思われるような人も柔和な者とされ、更正し、ホーリネスの麗しさを湛えたすばらしい人に変えられること⁹。

この講演集の最後の主題は、クリスチャンの「恵みにおける成長」である。

⁸ ジャン・W・クランメル「日本におけるメソジズムの研究序説」『ウェスレーとメソジスト双書』(ウェスレー協会、1970年)、7-48 頁

⁹ Charles G. Finney, *Lectures on Revivals of Religion*, ed. William G. McLoughlin (Cambridge: The Belknap Press of Harvard University, 1960), 17-18.

フィニーは恵みにおける成長とは、ホーリネスにおける成長であり神への従順が強まることだと述べている¹⁰。リバイバルは、まずクリスチャンが信仰により、キリストの恵みを新たに豊かにいただくこと、豊かな聖霊のバプテスマにあずかることなしに期待できないのであって、罪人に対し、“あなたはどこにいるのか”と説教しなければならないように、教会に対しても“あなたはどこにいるのか”と説かれなければならないとフィニーは考えた¹¹。成熟期のフィニーにとって、リバイバルとクリスチャンの聖化、即ちクリスチャン・キャラクターの形成は切り離せないものとなったのである。

フィニーのクリスチャン・キャラクター形成論を理解するにあたり、ウェスレーの『キリスト者の完全』による影響を無視することはできない。フィニーは **"Christian Perfection"** という説教の中で次のように述べている。「私は最近ウェスレー氏の『キリスト者の完全の明白な説明』という、今まで決して見たことのない書物を読みました。私は幾つかの言い回しについて反論すべき点を見出しましたが、それは所感というよりも言い回しの問題だと思います。ですからこの点を差し引いても、賞賛すべき書物ですので、是非教会員の皆様全員が読んでくださいますようお願いしております」¹²。この講演はニューヨーク市の **Chatham Street Chapel** で 1835 年 12 月 25 日から 1836 年 3 月 11 日までの金曜日の夜、そして同年 11 月中旬から 1837 年 4 月中旬にかけては **Broadway Tabernacle** で金曜日或いは木曜日の夜に行われた。フィニーは **Lectures on Revivals of Religion** 以降、自分自身の信仰と愛における安定性の欠如に悩み信仰生活の刷新を切実に祈り求め、また伝道者としても回心したクリスチャンを聖い生活をする者へと導く必要を痛感するようになった。オベリン・カレッジでは 1836 年夏にリバイバルを経験し、神学生たちはクリスチャンの生涯における全的聖化 (**entire sanctification**) について熱心に論じ合うようになった。エイサ・マハン (**Asa Mahan, 1799–1889**) 学長が、**"second conversion", "baptism with the Holy Ghost"** と呼んだ経験を証したことが契機

となり、神学部の教授たちは聖化の神学を検討するようになった¹³。フィニーは、**Broadway Tabernacle** で毎週の講演をするためにその準備をした際、マハンと共に聖書と聖化論や完全論に関する書物を研究した。ウェスレーの『キリスト者の完全』はこのような経緯で読まれたのである。フィニーの **Lectures to Professing Christian** における第 19 回、20 回目の説教は、マタイの福音書 5 章 43 節～48 節より、「キリスト者の完全」(**Christian Perfection**) という主題でなされている。最初の説教で、フィニーは「キリスト者の完全」を、神の律法への完全な従順、即ち心を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛し、あなたの隣人をあなた自身のように愛することと定義している¹⁴。

神は人を道徳的存在として御自身のかたち似せて造られたので、人は神御自身と同じキャラクターにあずかることができる。公平無私に愛すること、全き愛 (**perfect love**)、神のようにただひたすらに他者の益を計る。これが **"Christian Perfection"** である。福音は救いの条件として、完全を求めてはいないが、律法を無視するものではなく、むしろ律法を成就していくものである。フィニーは、完全な聖化 (**perfect sanctification**) は、聖書全体に約束された大いなる祝福であり、それゆえこの世におけるキリスト者の聖化は神のご意志であると論じている¹⁵。

フィニー何故世には完全が見られないのかについての理由として、福音の偉大な目的を看過し、神の約束を信じてそれを得ようと願わないこと、即ちキリストが私たちにとって神の知恵となり、義となり、聖めとなり、贖いになられたことを信じないことと、神が与えようと願っておられる聖霊への

¹³ Melvin Dieter ed. *The 19th-Century Holiness Movement* (Kansas City: beacon Hill Press, 1998), 165–202. これは **"Oberlin Holiness Movement"** となり **"Oberlin Theology"** と呼ばれるようになった。オベリン神学はクリスチャン・ライフの第二の成熟した段階（聖化の恵み）を強調するが、フィニーはそれを聖霊のバプテスマによる神への全き信頼と献身によると解釈し、またそれは劇的なセコンド・ブレスリングではなく、安定した成長により到達しようと考えた。Walter A. Elwell ed. *Evangelical Dictionary of Theology* (Grand Rapids: Baker Book House, 1984), 786.

¹⁴ LPC, 341, 344.

¹⁵ LPC, 346–54. フィニーは以下の聖書箇所を引用しながら論じている。2Pet 1:4, Ez 36:25-27, Jer 32:8, Zec 8:1, Dan 9:24, Tit 2 :13, Eph 5:26, 1Jn 1:9.

¹⁰ Ibid., 447.

¹¹ Ibid., 470.

¹² Charles G. Finney, *Lectures to Professing Christians* (Oberlin: Goodrich, 1880), 358–359. 以下 LPC と表記。

健全な依存の欠如を挙げている¹⁶。フィニーは、"Christian Perfection"という主題での2回目の説教で、聖化を妨げている要因として、自分は最後の審判で滅びに向かうような人間ではないという高ぶり、正直に生き、慈善活動をすれば、神の恵みがあるとするユニテリアンの考え方、つまり教会が行いによる聖化を求め、ぶどうの木につながった枝が実を結ぶという譬えに表現されたキリストとの本来的な関係の喪失を挙げ、救い主の必要性への自覚(黙示録3章17節)と信仰(1コリント1章30節)を聴衆に強く訴えている¹⁷。

フィニーの「キリスト者の完全」の理解とそれに向かわせるキリスト中心的(Christocentric)、聖霊中心的(Pneumatocentric)な強調には、ウェスレーの影響が明らかに読み取れるが、フィニーにおいては、その手段としての聖霊のバプテスマという表現が特色となっている。聖霊のバプテスマとは、主イエスの肉を食べ、血を飲むと表現できるような、キリストとの経験的合一(Experimental Union with Christ)をもたらし、キリスト者の奉仕に力を与え、力ある祈りの鍵となるものである¹⁸。

ウェスレーはペンテコステと聖化を関連づけていたが、「聖霊のバプテスマ」という言い方ではなく、「御霊の証し」という表現を用いている¹⁹。フィニーは聖化の研究過程でウェスレーの「キリスト者の完全」に出会い、旧約及び新約聖書の研究から聖なるものとする霊(sanctifying Spirit)についての聖書の一貫した力強い約束を見だし、聖霊のバプテスマの教理を発展させた²⁰。1840年の秋、影響力のあるメソジストの週刊誌 *New York Christian Advocate* の編集者ジョージ・ペック(George O. Peck)は、フィニーの聖霊の

¹⁶ LPC, 360–63.

¹⁷ LPC, 364–82.

¹⁸ John L. Gresham Jr. *Charles G. Finney's Doctrine of the Holy Spirit* (Peabody: Hendrickson Publishers, 1987), 27–49. グレシャムは、フィニーの聖霊のバプテスマ論における貢献の一つは、信者の主観的宗教体験にとどまらず、世界へのミッションという聖書的な方向付けにあると評価している。

¹⁹ レオ・ジョージ・コックス著 田中・平位・蔦田訳『ウェスレーの完全論』(日本ウェスレー出版協会、1981)、187–89頁

²⁰ Charles G. Finney, Timothy L. Smith ed. *The Promise of The Spirit* (Minneapolis: Bethany Fellowship, 1980), 1–3. 及び以下の文献を参照。Timothy L. Smith "The Doctrine of the Sanctifying Spirit: Finney's Synthesis of Wesleyan and Covenant Theology". *Wesleyan Theological Journal* 13(Spring 1978): 92–113.

バプテスマ論に着目し、ジョン・フレッチャー(John Fletcher)以来、聖霊のバプテスマと全的聖化の経験を同一視した最初のメソジストとなった。1855年のメソジストのキャンプ・ミーティングやリバイバルの報告書には、「聖霊のバプテスマにあずかった」(baptized)、「聖霊に満たされた」(filled with the Spirit)という表現が「全き愛」(perfect love)、「全的聖化」(entire sanctification)と同じような意味で用いられるようになった。このようにフィニーの聖霊のバプテスマ論は、19世紀のアメリカ・メソジストに影響を与えた点は無視できない²¹。

ウェスレーの言うキリスト者の完全とは、「perfected」ではなく「perfecting」という神の完全に近づく無限の成長過程であり、また信仰による神との関係に基づき、行動と生活を通して培われる「habitus」である²²。この点はフィニーのヨハネの手紙第1、3章9節「だれでも神から生まれた者は罪を犯しません。なぜなら、神の種がその人のうちにとどまっているからです。その人は神から生まれたので、罪を犯すことができないのです。」

(Whoever is born of God doth not commit sin; for his seed remaineth in him; and he cannot sin, because he is born of God)からの「習性的聖潔:クリスチャン・キャラクターの試金石」(Habitual Holiness: The Test of Christian Character)という説教に反映されている²³。フィニーは、神から生まれるということは、道徳的性格及び人生行路全体の変化、換言すれば究極的意図(ultimate intention)或いは目的選択における徹底的な変化であると述べている。罪人は神の御霊とみことばによって、この自発的な変化(voluntary change)へと促されるのである。キリストは、「悔い改めて幼子のようにならない限り、決して天の御国に入ることはできない」と言われているが、これは道徳的判断のできる存在が、究極的意図を転換したとき、以前とは違った全く新しいいのちを生きる必然性があることを比喩的、強調的に表現しているとフィニーは解釈している²⁴。ヨハネ書簡では、クリスチャンが光の中を

²¹ Ibid., 25.

²² 藤本満「ウェスレーによる『人間形成』論」、152, 153頁

²³ Charles G. Finney, Louis G. Parkhurst ed. *Principles of Holiness* (Minneapolis: Bethany House Publishers, 1984), 93–104. 聖書は新改訳第3版より引用。

²⁴ Ibid., 97.

歩むために、罪を神に言い表すことによって、御子イエスの血による赦し、きよめにあずかる聖い生活を求めることが教えられている。ホーリネスは、神と兄弟への愛と神の律法への服従によって、体現されるべきものである。クリスチャンは意図的に罪を繰り返すような生活を送る存在ではない。神の愛のゆえにホーリネスを希求する存在である。フィニーは、神から生まれた者であるか否か、即ちクリスチャンであるか否かの試金石は道徳的性格の習性的成熟 (**habitual perfection of moral character**) にあり、聖い生活が慣わしとなる習性的聖潔 (**Habitual Holiness**) こそが、クリスチャン・キャラクターだと定義しているのである²⁵。またフィニーは、クリスチャン・キャラクターの安定性の秘訣は、聖霊のバプテスマにあると述べている。それは聖霊のバプテスマが、十字架上で罪の贖いを成し遂げられ、三日後に復活されたキリストとの経験的合一をもたらし、神と兄弟への愛に向かわせるからである。この聖霊の働きは、聖め主なるキリストへの信仰によって与えられるものであり、生涯の中で繰り返し祈り求めるべきものとフィニーは述べている。フィニーにおいて聖霊のバプテスマは、聖霊の油注ぎ (**anointing**)、聖霊の証印 (**ensealing of the Spirit**) とも表現されている²⁶。

このようにウェスレーとフィニーのリバイバル観の前提には、明確に「キリスト者の完全」或いは「クリスチャン・キャラクターの形成」という聖化論と実践神学が存在する。ウェスレーは、真のキリスト者形成をメソジストにおいて具体的に実践したが、フィニーもまたクリスチャン・キャラクター形成のための実践的指針として家庭教育論、教会論、神学教育論を展開している点に着目したい。次節ではメソジストの **"Altar Call Evangelism"** がフィニーの **"New Measure Revivalism"** に与えた影響を検討するが、**"Altar Call Evangelism"** は本来ウェスレー、そしてフィニーのクリスチャン・キャラクター形成論を抜きにした伝道方法だけの問題ではないことを認識する必要があると思われる。

²⁵ **Ibid.**, 104. フィニーが言う "perfection" は、"perfecting" という意味を持つので、筆者は成熟と訳した。

²⁶ Charles G. Finney, Louis Gifford Parkhurst, Jr. ed. *Principles of Discipleship* (Mnneapolis: Bethany House Publishers, 1988), 84. 及び Charles G. Finney, *Sermons on Gospel Themes* (New York: Revell, 1876), 398–417.

II メソジストの "Altar Call Evangelism" (Mourner's Bench) のフィニーへの影響について

ウェスレーの「恵みの手段」 (**means of grace**) という説教においては、神が罪人を救いに連れてこられる時に、心に訴える説教或いは霊的な会話を通して聖書研究に向かわせ、そして聖書の教えを奨励する霊的書物によって魂が扱われ、罪人は神に祈り始めるようになると説かれている。罪人は大会衆の中で信仰深い人々と共に祈ることを望むようになり、他の人々が聖餐台に進み出るのを見て、活ける神の救いの道に生きようと決心する。ウェスレーにとって「恵みの手段」というものは、罪人だけに対するものではなく、クリスチャンが神との交わりを深めるために常に用いるべきものであった²⁷。

ウェスレーは、主の食卓に罪人を招くことと、主ご自身のもとへ彼らを招くことが同じことであることを学ぶようになった。アルダスゲイト経験以降の成熟期のウェスレーは、主の晩餐を **"Gospel Feast"**、復活の主との喜ばしき集いとして位置づけるようになったのである²⁸。初期のメソジストは、祭壇の **rail** に進み出て跪き、牧師からパンと葡萄酒を受けるという国教会の習慣に従っていた。聖餐台を祭壇のように **altar-wise** に設置して **"altar"** と呼んだ。伝統的なウェスレーアンの会堂設計においては、講壇の前に聖餐拝領台 (**communion rail**) が置かれ、みことばと sacrament が二重に強調されるようになっており、これがメソジスト・リバイバルの顕著な特徴である²⁹。ウェスレーは聖餐において **Book of Common Prayer** の枠組みを尊重しながらも、賛美 (**Hymns on the Lord's Supper**) を取り入れ、締めくくりに即興の祈り (**extempore prayer**) を加えることによってリバイバルのスピリットを表現することができたのである。

聖餐式は熱心な教会員たることと (**churchmanship**) と福音主義 (**evangelism**) を体現するものであり、確認の礼典 (**confirming ordinance**)

²⁷ 『ウェスレー著作集』、新教出版社 1980 年、V : 332–338

²⁸ John C. Bowmer, *The Sacrament of the Lord's Supper in Early Methodism* (London: Dacre Press, 1951), 56–58.

²⁹ **Ibid.**, 94.

と回心を促す礼典 (**converting ordinance**) という性格を有するものであった³⁰。救済論的にはカルヴィニズムの贖罪の限定性に対して、ウェスレーは贖罪の普遍性というアルミニアンニズムの立場を取る。陪餐資格は、キリストの血潮への全き信頼という単純なものであるが、聖餐に臨む霊的備えを大切にしていた。それはソサエティー (12 人単位の小グループ「**class** 組会」に分割され、愛の中に互いを見守り、キリスト者の完全に向けて育み合うことを目的とした) への入会により、組会が発行する会員券を受け取るものであったが、入会条件は「来るべき御怒りを避け、罪から救われたいという願望を持っていること」という単純なものであった³¹。それは子どもたちにも開かれたものであった。18 世紀英国におけるウェスレー兄弟によるリバイバルは、彼らの精力的な福音伝道により救われた人々が、ソサエティーを形成し、心からの賛美と祈りにより、キリストの現臨に触れるような聖餐にあずかることによるリバイバルであった³²。

近年、ウェスレー・メソジスト研究において、宣教の業としての聖餐が着目されているが、この点はアメリカにおける”**Altar Call Evangelism**”の理解に不可欠な点であると思われる³³。“**Altar Call Evangelism**”に関する歴史的研究をしたデイヴィッド・ベネット (**David Benett**) は、**Altar Call** について次のように定義している。「伝道の一方法で、福音を提示し、説教の結びで公にイエス・キリストに応答するために、未信者に与えられる計画された招きを定期的に行う伝道方法。応答を呼びかける、手を挙げる、伝道の場に設定された場に立つ、或いは歩いて行くこと等である。招きへの応答は通常即座のカウンセリングによってフォローされ、後に何らかのフォロー・アップがなされる。祭壇への招きは、しばしば再献身 **rededication** と伝道への招き **call to mission** をクリスチャンにアピールすることも取り入れている。この伝道方法は神学ではないが、独特の神学を反映し、支持するものである」³⁴。

³⁰ **Ibid.**, 102–06.

³¹ **Ibid.**, 119. 及び『標準ウェスレー日記』インマヌエル総合伝道団 1984 年 IV : 第 4 部 172 頁

³² **Ibid.**, 205.

³³ 坂本誠「宣教の業としての聖餐」『ウェスレー・メソジスト研究』5 (教文館、2004 年) 33–54 頁

³⁴ **David Benett, The Altar Call : Its Origins and Present Usage** (Lanham: University Press

つまりフィニーは”**Altar Call Evangelism**”の創始者でもなく、その神学を発展させた人物でもないが、この伝道方法を普及させ、伝道説教の本質的要素としての伝道精神を鼓舞した人物である³⁵。

“**Altar Call Evangelism**”発展の主要な役割を担っていたのは、メソジストである。ヴァレンタイン・クック (**Valentain Cook**) が 1795 年頃、ペンシルヴァニア州の家の集会で、聖餐桌の前に設置した空席に悔悛者を招いた記録、ステイス・ミード (**Stith Mead**) が 1801–1803 年に起きたジョージア州北部のリバイバルで、悔悛者のために祈るため、聖餐桌の周りに来て跪くよう招いた記録がある。また 1801 年初頭、**Richard Sneath** はフィラデルフィア伝道の記録を書簡に残している。「私は、全ての悔悛者に、特別に祈るために聖餐桌に来るように招きました。これは魂がキリストのもとに来るのを妨げる恥じらいを除去し、彼らを信仰の実践に駆り立てるのに有用だということがわかりました」³⁶。18 世紀後半から 19 世紀初頭にかけてアメリカのメソジストは集会時に招き (**public invitation**) を行っていたことがわかるが、これが一般的な習慣になったのは、フロンティアにおけるキャンプ・ミーティングが始められてからである。”**Altar Call Evangelism**”には、キリストの贖罪は選ばれた者に限定された (**Limited Atonement**) ものではなく、全ての人に与えられたものであり、個人はそれに応答する機会が与えられているというアルミニアンニズム神学の前提があるが、キリストの贖罪に関し、普遍性を提示するという意味で、アルミニアンニズムの立場を示すが、ウェスレーは聖霊による恵みの自由を強調し、人が神の恵みを自由意志によって左右できるとは考えていない。そういう意味で、”**Altar Call Evangelism**”はアルミニアンニズムではない³⁷。ウェスレーは、ロンドンの英国教会主教に、アメリカへ派遣した説教者のための按手を申請したが認可されなかったため、自ら 1784 年にトマス・コーク (**Thomas Coke**) をアメリカの指導監督者 (**superintendent**) として任命し、既に宣教師として派遣されていたフランシス・アズベリー (**Francis Asbury, 1745–1816**) に按手礼を施し、メソジスト監督教会 (**Methodist**

of America, 2000), X, VI.

³⁵ **Ibid.**, 103.

³⁶ **Ibid.**, 37–41.

³⁷ **Ibid.**, 56. 小林和夫『聖化論の研究』日本ホーリネス教団、2004 年、174、175 頁

Episcopal Church) の指導監督者とした。同時に執事と長老(ordained deacon and elder)が任命され洗礼と主の晩餐の執行ができるようになり、一教派として確立された³⁸。アメリカのメソジストは、1784年当時は説教者 83人と会員 14,988人の規模であったが、1810年には説教者 606人に白人会員 139,836人、有色人種会員 34,724人へと急激に成長している³⁹。この急激な発展の要因としては、巡回伝道者(信徒説教者を含む)を積極的に定住牧師のいないフロンティアへ派遣したことと、キャンプ・ミーティングを活用したことによる。特にフロンティアにおいては、キャンプ・ミーティングが最も効果的に福音を伝える手段であり、そこで"Altar Call Evangelism"が一般的になった⁴⁰。

19世紀の第二次大信仰覚醒運動で重要な役割を担ったメソジストのキャンプ・ミーティングにおける"Altar Call"は、新たに回心するか、イエス・キリストへの献身の更新を願う人が聖餐拝領台"communion rail"に跪くために前に出てくるよう招く習慣にある。キャンプ・ミーティングにおける"Altar"は、通常講壇の下で 6~10 ヤード四方に囲われた座席付きの場であった⁴¹。それは"Mourner's Bench"とも言われた。(フィニーの"Anxious Seat" (Anxious Bench) は、このメソジストの伝道方法を採用したものである⁴²。)

ピーター・カートライト(Peter Cartwright, 1785-1872) は、19世紀におけるメソジストの指導的な巡回伝道者であるが、彼の自伝から"Altar Call"がどのようなものであったかがわかる。カートライトにとって、祭壇は神の祭壇であり、いい加減な気持ちでたむろする場ではなく、説教後の招きに魂を揺さぶられた真の悔悛者が、跪いて神の憐れみを祈り求める場であった。悔い改めと信仰へ導く場、再献身の場であった。カートライトは、とかく騒々し

くなりがちなキャンプ・ミーティングに霊的な雰囲気を保つために、神の祭壇をきよめ、祭壇を良好な状態に保ち、規則正しく行うことを心がけた。ある晩には 100人近い人々が招きに応答し、平安を得、このようにしてメソジスト教会は発展していったと回顧している⁴³。

フィニーは、メソジストの"Altar Call Evangelism"を積極的に評価し取り入れているが、それはカートライトも書いているように、メソジスト説教者の説教が平明で、ポイントが明確で、心暖かで、聴衆に生気を与え、"Altar Call"によって、活けるイエスへの信仰に多くの魂を導いていたからであった⁴⁴。フィニーは、リバイバルを促進する手段として、"Anxious Seat" (Anxious Bench) を挙げているが、これは伝道集会時に特定の場所を設け、悔悛者を招き、個別に霊的な導きをなし、共に祈るものであり、前述のメソジストの伝道方法である"Altar Call"のフィニー的な表現であり、フィニーのいわゆる"New Measure Revivalism"の中核を占めるものである。フィニーは、福音に心を探られ、悔悛した人が、キリストに救いを求めて、"Anxious Seat" (Anxious Bench) に向かうこと、換言すればこのような真理への応答の機会を提供することは、回心への重要なステップと考えたのである。教会は常に福音への応答を促すことの必要性を意識してきたのであり、初代教会においては、福音が説かれた時、キリストにつくことを望む者は、バプテスマを受けるように招かれた。フィニーにとって、"Anxious Seat" はクリスチャンになることを公に表すものとして、初代教会のバプテスマと同質のものであった⁴⁵。

フィニーは自伝の中で"Anxious Seat"を活用した伝道について次のように

⁴³ Peter Cartwright, *Autobiography of Peter Cartwright* (New York: Abingdon Press, 1966), 158-59.

⁴⁴ Finney, *Lectures on Revivals of Religion*, 273.

⁴⁵ *Ibid.*, 260-69. フィニーは、神は礼拝形態或いは伝道方法を特定しておらず、ペンテコステ以降のキリスト教会の誕生以来、常に「新しい方法」"New Measures"を摂理の中で用いられることによって、教会の信仰復興を導いてこられたと述べている。フィニーの場合、礼拝で即興の祈り、無原稿説教、斬新な礼拝音楽、信徒による祈祷会、信徒説教、婦人祈祷会、Anxious Seatを中心とした集会運営等をNew Measuresとして理解していた。New Measuresはオールド・スクール神学とその伝道・礼拝形態に対するNewであり、メソジストに対してNewとは言えない。New Measuresへの批判は、Asahel Nettleton, John W. Nevin, Charles Hodge等保守的な陣営からなされた。

³⁸ Terry D. Bilhartz ed. *Francis Asbury's America: An Album of Early American Methodism* (Grand Rapids: Francis Asbury Press, 1984), 28-31.

³⁹ Wade Crawford Barclay, *Early American Methodism 1769-1844: Missionary Motivation and Expansion* (The Board of Mission and Church Expansion: New York, 1949), 121.

⁴⁰ Bennett, *The Altar Call*, 63.

⁴¹ *Ibid.*, 64.

⁴² Ki-Jong Kim, "Changing Concepts of Revival Demonstrated in the Public Ministries of George Whitefield and Charles Finney." Ph. D. diss. Trinity International University, 2002, 189.

回顧している。「私は今まで、ずっと常に、世の前に自分が犯してきた罪を明らかにするために、罪人を混合の会衆 (**mixed multitude**) から呼び出して、神の側に立たせること、つまり属する場を変えるように招き、世を捨てキリストのもとに来るために、自分の義を断念しキリストの義を受け入れること、要約すれば、心の転換を引き起こすことが必要であったと考えてきましたし、このような結論に至りました。私はこの方法を用いて失望したことがありませんでした。私はいつもこれが非常に必要とされたことがわかりました」。⁴⁶

フィニーの**"Anxious Seat"**の背後にあるアイデアは、基本的にメソジストの**"Altar Call"**と同一のものである。それは積極的にイエスによる救いを求める人と、そうでない人を分離 (**separation**) するためであった⁴⁷。フィニーは伝道生涯から、再生における神の働きは、魂に教え、議論し、勧告し、懇願することから成ることを教えられ、そのために御霊の教えに依り頼んで罪人に説き、彼の前に罪を示し、イエスについて御霊が取り上げて下さって、彼の罪と悪を示し、彼の罪を自主的に捨てるよう導かれることを確信していたのである⁴⁸。フィニーの説教は、**"Remarks"**というあだ名が付けられるほどに、聴衆に応答決心を迫るダイナミックなものであった⁴⁹。フィニーの**"Anxious Seat"**に代表される伝道方法 (**New Measure Revivalism**) の成功は、メソジストの**"Altar Call"**をフロンティアから都市地域に至る幅広い社会層に一般化することに貢献し、逆にフィニーの **New Measure Revivalism** をメソジストが取り入れるようにもなったのである⁵⁰。

結論：フィニーのリバイバル神学へのウェスレーとメソジズムの影響について

⁴⁶ Charles G. Finney, *The Memoirs of Charles G. Finney*, ed. Garth M. Rosell & Richard A. G. Dupuis (Grand Rapids: Zondervan Publishing House, 1989), 323.

⁴⁷ Richard Cawardine, "The Second Great Awakening in the Urban Centers: An Examination of Methodism and the New Measures". *Journal of American History* 59, no.2 (September 1972) : 327–340.

⁴⁸ Finney, *The Memoirs of Charles G. Finney*, 320–22.

⁴⁹ David B. Chesebrough, *Charles G. Finney: Revivalistic Rhetoric* (Westport: Greenwood Press, 2002), 95–113.

⁵⁰ Cawardine, "The Second Great Awakening in the Urban Centers", 339–40.

ウェスレーの『キリスト者の完全』は、リバイバルの前提としてのキリスト・キャラクター形成のための、聖化論の再考と実践神学の再検討を迫るものであった。ウェスレーは、キリストへの信仰により、聖霊によって与えられた恵みが修練を通して習性的気質 (**habitual disposition**) となることを目指したが、19世紀のフィニーが、それを習性的聖潔 (**Habitual Holiness**) として表現しているところにウェスレーの思想が継承されていると思われる。フィニーの独自性は、習性的聖潔 (**Habitual Holiness**) 或いはキリスト・キャラクターの安定性の秘訣として、聖霊のバプテスマの教理を導入したことにある。

ウェスレーは、みことばと確証の礼典 (**confirming ordinance**) でありかつ回心を促す礼典 (**converting ordinance**) であるものとして位置づけた聖餐を、恵みの手段として強調し、それはメソジスト・リバイバルの特徴になった。アメリカにおいて、祭壇に進み出て跪いて牧師からパンと葡萄酒を受けるという国教会の聖餐形式が、伝道説教で招きをなし、心を動かされた者が応答として祭壇に進み出る **"Altar Call Evangelism"** に発展していったとする説には尚詳細な研究が必要であるが、興味深い点である。ウェスレーにとって聖餐がそうであったように、**"Altar Call Evangelism"** は、キリストと未回心者の双方に、世から明確に分離されて、イエス・キリストに属する者として生きるか否かを問いかけるものであった。フィニーの **"Anxious Seat"** はまさにそのような性質を帯びていたのである⁵¹。フィニーにとって招きは真剣なものであり、それは聖餐についての説教にも反映されている。

「聖餐は本来、キリストの心を打たずにはおかないものであります。キリストは、教会とキリストが悔い砕かれた心で、信頼をもって御自身を仰ぎ見、みことばと贖いの血潮に信頼するならば、御愛を注ぎ出さずにはおれないのです。御座に上げられた贖い主にとって、御自身の教会が代々御自身の死を告げ知らせているのをご覧になることは感動的な場面なのです。しかしキリストの御心にとって、信仰告白をした人々が、かたくなで、無感動で、

⁵¹ William G. McLoughlin, *Modern Revivalism: Charles Grandison Finney to Billy Graham* (Eugene: Wipf&Stock Publishers, 2004), 57.

不信仰で、不敬虔な状態で聖餐に臨むことは非常に嫌悪すべきことなのです。兄弟たちよ！今日の午後、あなたがたの主の食卓に向かう備えはできておられますか。悔い砕かれた心で向かうほどにキリストの御心に適うものとなっておりますでしょうか。救い主の御前に、真実にへりくだることができるでしょうか。キリストの御足に、悔い改めの涙を注ぐことができますでしょうか。来なさい、兄弟たちよ！愛に満ちた御声が我々を招いておられます。来なさい。しかし、どなたも招きを侮ることがありませんように」。⁵²

フィニーのリバイバル神学、換言すればクリスチャン・キャラクター形成論は、ウェスレーとメソジズムの影響を強く受けているが、19世紀アメリカにおいて、影響は一方通行ではなく、フィニーの聖化論（聖霊のバプテスマ論）と"New Measure Revivalism" がメソジズムに影響を及ぼすという相互作用があった。この点については、今回は指摘するにとどめ今後研究を深めていきたい。

現代日本の教会で、"Altar Call Evangelism" を考えると、イエス・キリストに属する者として世から分離を体現する機会を与えることをもっと積極的に為すべきだと思われる。またそれが単発的になされるのではなく、ウェスレーやフィニーが重要視したクリスチャン・キャラクター形成論との有機的な関係をもって展開されることが求められているのではないだろうか。

（日本福音キリスト教会連合・西上尾福音教会牧師、聖学院大学博士課程）

⁵² Charles G. Finney, "On The Lord's Supper". The Oberlin Evangelist April 1, 1846. 1–9.
<http://truthheart.com/EarlyOberlinCD/CD/Finney/OE>